

召集初年兵

## 中南支に転戦

高知県 沢田良男

—沢田さんは現役でしたか、召集ですか、どこの部隊ですか。

私は二十八歳で召集を受けて、歩兵第四十四連隊に入隊して教育を受け、ただちに支那方面へ行ったのです。

これからその苦勞話をしたいと思います。

鯨第六八八四部隊（第四の師団歩兵第二百三十六連隊）に入隊して湘桂作戦に参加したのです。昭和十九年七月下旬でした。

—それでは湘桂作戦についてお話し下さい。

十九年八月四日、第三次衡陽攻略戦が開始されました。八月二十六日には第六方面軍が新設されたと思います。軍司令官は岡村寧次大將でした。八月二十九日、私の師団の属している第十一軍（呂集団といいました）は、

衡陽の西地区に増強中の支那第六、第四戦区軍に対し、洪橋というところで撃滅戦が開始されたのです。

はげしい戦闘で洪橋の敵を破り、九月七日零陵、十四日に全県を共に占領しました（両方とも中国軍の飛行場のあるところですよ）。

九月二十九日宝慶、十月一日常寧と引きつづいて攻略したのですが、ずいぶんひどいことの連続でした。どこそこ占領、どこそこ攻略と口で言えば簡単ですが、実際に戦闘に参加した兵隊でなければ味わえない悲惨な光景をなんどもみたり、経験しています。

第十一軍というのは支那派遣軍のなかでの戦闘専門の軍ですから、戦闘戦闘の連続なのです。作戦のねらいは、中国軍の米軍航空基地を占領して撃滅するためだったのです。

—鯨兵団は桂林攻略の主力だったと思いますが。

その最も重要なのが桂林飛行場や柳州です。全県を越えて南下しますと、周囲の様子はかわり、南画にあるような筍のような岩山がそびえているのです。住民の気性も荒くて、同じ中国人といっても、漢民族とは違った少

数民族で、他国の中国人でさえはいれないのです。

岩山は石灰岩で出来ているようで、沢山の洞窟がありそれが自然の倉庫であったり、トーチカ陣地だったりするのです。「守るにやすく、攻めるに不利」という地形でした。

十一月三日には、我が十一軍は桂林と柳州を同時に攻略するため、攻勢を發揮しました。私たちの鯨兵団は桂林に向かったのですが、砲、爆撃と地雷のためたくさんの人たちが戦死したり傷ついたので。私たち初年兵（といっても年配者）は体力的にも戦闘技術も充分ではありませんからよくぞ生きられたと自分でも思っています。

第十一軍は、南支の第二十三軍と共に柳州も攻略することができました。たしか十一月十日だということですよ。

—桂林攻略後は南部粵漢作戦ですね。

年が明けまして、衡陽（大激戦があった）、中国軍を撃滅したが、日本軍も大損害を受けて十九年六月攻略した）まで北上しました。今度は衡陽と南の広東省の飛行

場を攻略する作戦に参加したのです。一月二十七日には樂昌というところと韶州（韶関）の間の粵漢線を打通することが出来ました。そうして韶州で一か月間附近の警備にあたっていました。

昭和二十年四月五日には三南作戦が始まりました。もうそこは南支那で、第二十三軍の地域だったので。私たちの中隊は第二十三軍に配属され、米軍が上陸するかもしれないというので対米戦備にあたるわけです。

—その時はもう沖繩戦が始まり、台湾の爆撃は盛ん、本土決戦近いというときですね。

私の連隊は四月五日韶州を出発して、南部粵漢線路にあって、英徳—源潭墟をへて広東まで前進して、更に陶器で有名な仏山鎮から九江、江門をへて広東西方約百二十キロの台山県（香港と同緯度）に進出したのです。

連隊本部を台山に置いて、赤溪附近の南支那海岸最南端地域（マカオの西南百キロぐらい）で約一か月間、米軍上陸にそなえて洞窟陣地づくりをしました。毎日が米上陸軍げい撃の訓練でした。

しかし、掘削作業は資材が不足なので、昼夜兼行で二

十四時間作業です。中国とはいっても、南方（台湾の南端と同じ）とて炎暑のなかで、作業はなかなか進みません。しかも、附近は物資も少なく、給与は粗悪で、体力は消耗し、兵力も減少していきました。私たちはわずかに荔枝（ライチー）の実を食糧にするしかなかったのですが、我々にとっては味覚を楽しませてくれるだけでした。

—荔枝は最近日本でも果実屋に出まわっていますが、唐の楊貴妃が、増城県から長安まで早馬で運ばせたという美味なものです。部隊は当分南支駐留でしたか。

いや、二十年五月下旬、師団は支那派遣総軍の予備隊となったし、軍は対米上陸、対ソ戦、本土防衛のため戦線を縮小して中、北支へ集結を開始しました。台山附近から広東をへて、源潭墟附近に集結しまして江西省の南昌に向かって反転を命ぜられ北上を開始しました。

—折角苦勞してつくった陣地をおいての北上ですか。

六月二日、行動を開始しました。仏岡、翁源（広東北方二百キロメートル）をへて、迅速果敢に敵第七師の本

拠を占領して、竜南県城（江西省の南部）に集結したのです。中支軍が南支軍になってしまつて、また中支へもどるのですから大へんです。補充もあまりないから着のみ着のまま、みじめなものでした。中国服や中国の布靴をはいている者もありました。

—大へんな道のり、しかも炎暑のなかですが、終戦はどこで知りましたか。

八月十六日夕刻でした、師団司令部から連隊長集合の命令があつて、正式に停戦の天命を拝したことが我々末端にも伝えられました。

八月十七日将兵一同は涙のうちに栄光に輝く軍旗を、江西省豊城県丁家の地で奉焼。一切の書類等も同時に焼却しました。師団命令で全部焼きました。

—豊城というと南昌の南ですよ。六月竜南を出て北上したのですね、豊城迄は直距離でも五、六百キロメートルですかね、戦後のようすを伺いましょう。

その附近で現地抑留ですが十一月初旬にふたたび移駐を命ぜられ、南京の西南三十キロの揚子江岸の銅井鎮に前進し、同地付近に駐留しました。そこで野菜づくりや、

豚・鶏を飼いながら現地自活をはかり、本格的な復員を待ったのです。

しかし、終戦直後軍命令で書類を焼いたため、いろいろな復員事務が長引いてしまいました。

——現地自主抑留ですが武器は持ったままだったのですか。

十一月二十八日ついに中国軍の手で武装解除を受け、以後は中国軍の監督下におかれて道路作業や修理等に任じながら、昭和二十一年の正月を迎えました。

その間、中国軍が警備をしてくれた。二月上旬南京郊外に移動して、紫金山下の收容所で、飛行場や、道路の修理作業の毎日を送りながら復員を待った。しかし、その間、書類を全部焼いたため、皆より聞いたり、話合ったりして復員の準備をした。

四月下旬、柳の花咲くうららかな春が来た。五月にはいつて、五月五日南京をあとにして、上海集結の報がきました。南京から汽車輸送で上海へと向かった。その間、汽車がなかなか動かないので中国側と折衝し、(物や金を渡して)やっと上海北停車場に着くことが出来た。

五月十二日、やっとのことで飯田栈橋より乗船、一路博多へと向かった。五月十三日博多港に着いたがなかなか上陸に手間どっている。装具の検査、身体の消毒(DDTを頭から背中までかけられる……シラミ等駆除)を受け、同日召集解除された。帰郷の準備が終わり博多駅から我が家と向かった。